

研究主題

確かな国語力を付けるための指導の工夫

～「読むこと」と表現活動をつなげる～

要約： 確かな国語力を付けるために、その教材で付けられる力を分析し、単元のゴールに「読むこと」で付けた力を生かせるような表現活動を設定した。児童が目的意識をもって主体的に読み、付けた力を生かして表現活動をすることで、国語力が高められることが分かった。

キーワード： 確かな国語力 「読むこと」 表現活動 目的意識

I 主題・副題設定の理由

1. 主題設定の理由

学習指導要領の改訂に伴って、現場では「伝え合う力」を重視した活動中心の授業が展開されることが多くなった。児童の主体性を伸ばす上では目的意識のはっきりした言語活動を単元の中心に据えることは大変意義があった。しかし、活動中心の授業は、どのような力を付けるための活動なのかという意識が、教師にも曖昧で、国語科で付けるべき力を確かに付けることができていないという状況が多く見られた。

また、OECDのPISA調査で32か国中8位だった読解力が40か国中14位に下がった。この結果からも、児童に確かな力を付けていないのではないかということがうかがえる。PISA調査の結果分析から、我が国の生徒は、「テキストの解釈」、「熟考・評価」、の問題を苦手としていることが明らかになった。つまり、「読んで分かった」「理解できた」だけでは不十分で、理解したことをとらえ直して自分の考えをもつ力や、自分なりの考えをもって論述する力も、児童に育てていく必要があることを示していると言える。

PISA型読解力は、国語科だけで付ける力ではないが、活動中心の授業における問題点やPISA型読解力の低下などから、国語科で付けるべき力をとらえ直し、その力を付けるための指導の工夫が求められていると言える。そこで、主題を「確かな国語力を付けるための指導の工夫」と設定した。

2. 確かな国語力のとらえ

文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力」を基に学校教育で育てるべき国語力について考えると、国語科で求める国語力は、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」であると考えられる。この力は言語を中心とした情報を処理・操作する能力であり、国語力の中核である。つまり、言葉などを使って理解したり、表現したりすることのできる能力と言える。これからの時代に、人とかがわりながら生きていくためには、「理解する力」と「表す力」の両者を身に付けることが必要である。

そのためには、「聞く」「話す」「読む」「書く」の言語活動をしながらそれらの力を高めていかなければならない。そして、学習した時間だけではなく他の教材を学んだ時や他の教科を学ん

だ時にも生かすことのできる力でなければならない。

従って、確かな国語力とは国語科で付けた力を国語の時間以外にも生かし、「聞く」「話す」「読む」「書く」などの言語活動を思い通りに行うことのできる力であると考えられる。

3. 確かな国語力を付けるために

国語力を付けるためには、「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語活動を組み合わせて指導していくことが必要である。そして、国語力を高めるためには、その中でも特に「読むこと」の力を付けることを重視し、「書く」「話す」などの表現活動と組み合わせていくことが大切であると考えられる。なぜならば、単にテキストを読むだけではなく、読んで分かったことを基に書いたり話したりする表現活動をすることは、「考える力」「感じる力」「想像する力」などを高めると共に、表現することで「表す力」も高めることができるからである。また、PISA調査で指摘された、理解したことをとらえ直して自分の考えをもつ力を育成するためには、テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めることが特に重要である。

そこで、表現活動の中でも特に「書く」という活動に重点を置き、『「読むこと」と表現活動をつなげる』という副題を設定し、研究を進めることにした。付けた力を生かして使う経験をすることで、確かな国語力を付けることができると考える。

II 研究の目的

確かな国語力を付けるためには、「読むこと」と表現活動をどのようにつなげることが有効かについて探ることを目的とする。

III 研究の方法

1. 学習指導要領や文献を参考にしたり、公開授業を参観したりして、「読むこと」で付ける力とその指導方法について考え、その力を生かすことのできる表現活動について明らかにする。
2. 自分の考えた方法に基づき、「読むこと」と表現活動をつなげた単元構成を組み立てる。
3. 授業実践を行い、自分の考えた方法に基づいて成果と課題を考察する。

IV 研究の内容

1. 授業構想

教材で「学ぶ」ことができる単元を構成する

- ☆付けたい力をはっきりさせる
- ☆学んだことを生かせる表現活動を単元のゴールに設定する

主体的に読みながら読みの方法を学ぶ

- ☆読むための方法をはっきりと示す
- ☆話し合いながら、読むための方法を学ぶ

学びを確かにするための表現活動をする

- ☆表現することで、読む力を高める
- ☆評価することで学びを確かにする

2. 授業実践 I (文学的文章)について

- 単元名
だれだって読みたくなるような「本の帯」を作ろう ～「三年とうげ」(光村3年上)を通して～
- 指導過程
第一次
本の帯について理解し、帯作りの意欲をもつ
第二次
登場人物の人柄、物語の山場、表現のおもしろさについて学び、「三年とうげ」の本の帯を作る
第三次
本の帯を作るという意欲をもって民話を読み、あらすじや登場人物の人柄などをとらえて、おもしろさが伝わるように本の帯を書く

授業実践Iでは「三年とうげ」という教材を使って「読むこと」の活動を行い、その学習で付けた力をもとにして「自分が読んだ本の帯を書く」という表現活動を行う実践を試みた。

そのために、この単元で付ける力を「ア 登場人物の人柄をとらえる力」「イ 山場をとらえる力」「ウ 表現の良さを味わう力」と考えた。「読むこと」の活動でこれらの力を身に付けることができれば、「本の帯を書く」という表現活動をする時に、生かすことができるはずである。また、他の本を読む時にもこれらの力が生かされ、主体的に読むことができると考えた。

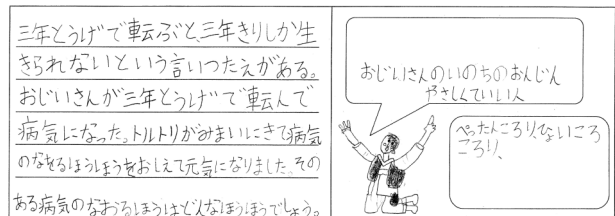
そこで、本の帯に書く内容を「登場人物の紹介」「あらすじ」「特徴的な表現」に限定し、「本の帯を作る」という目的意識をもたせて「読むこと」の活動を行った。それらを読むための方法を以下のように考え実践を行った。

- ア その人の行動や様子が分かる文を見付ける
- イ あらすじを書く時に、本の帯に書かずに秘密にした方が良い場面はどこかを探す
- ウ リズム感がある言葉や、音を表す言葉を見付ける

児童は、「本の帯を書く」という表現活動をゴールにすることで、「読むこと」の学習の目

的意識をもつことができた。そのため、読むための方法を主体的に学び、学んだことを三年とうげの本の帯に生かすことができた。

また、三年とうげの内容をしっかりと読めたかどうか、自分の作った本の帯に表れるので「読むこと」で付けた力を評価することができた。さらに、自分で選んだ昔話の本に、帯を付ける時には「三年とうげ」の本の帯を作った経験を生かし、それぞれが「登場人物」や「あらすじ」、「特徴的な表現」などを考えて、本の帯を作ることができた。



資料① 「三年とうげ」の本の帯



3. 授業実践 II (説明的文章)について

- 単元名
たしかめながら読もう
～「一本の木」(光村2年下)を通して～
- 指導過程
第一次
イラストブックの説明書を書きたいという意欲をもつ
第二次
文章構成、順序を表す言葉、叙述と挿絵のつながりについて学ぶ
第三次
イラストを描く順序が分かるように、説明の仕方を工夫してイラストブックの説明書を作る

授業実践IIでは、「一本の木」という説明的文章を使って、文学的文章の時と同じように「読むこと」と表現活動をつなげる実践をした。

教材で「学ぶ」ことができる単元を構成する

- ☆付けたい力をはっきりさせる
- 教材で付ける力を「ア 段落のまとまりを考えて、内容の大体をとらえる力」「イ 叙述の順序を考えながら内容を読む力」「ウ 叙述と挿絵を照らし合わせながら内容を正しく読む力」と考えた。

☆学んだことを生かせる表現活動を単元のゴールに設定する

単元のゴールに、イラストの説明書作りを設定した。イラストの描き方を人に教えるために、順序を考えて説明する文章を書く活動は、「読むこと」で付けた力を生かすことができると考えた。また、イラストは、児童にとって興味関心が高く、イラストの説明書を作りたいという意欲をもって「一本の木」を読む学習を行った。目的意識をもつことで、主体的に「読むこと」の学習ができた。

主体的に読みながら読みの方法を学ぶ

☆読むための方法をはっきりと示す

上記の力を付けるための読みの方法を次のように考えた。

- ア 「初め」「中」「終わり」の文章構成をとらえることで、内容の大体を読む
- イ 順序を表す言葉に注目して、文章に書かれている内容を順序よく読む
- ウ 挿絵と叙述を照らし合わせて、内容を正しく読み取る

☆話し合いながら、読むための方法を学ぶ

段落のまとまりを考えて、内容の大体をとらえる力を付ける

文書の中から木の描き方を説明した部分を取り出す活動をした。木の描き方を書いてある部分を取り出すことで、「初め」「中」「終わり」の文章構成に分ける方法を学ぶことができると考えた。木の描き方が書いてあると考へた理由について、児童は話し合いながら、その前後に「初め」と「終わり」があることを知ることができた。「初め」には、紹介が書いてあることや「終わり」は付け加える内容が書いてあることも見付けた。また、木の描き方を書いてある「中」の部分は、順序を表す言葉を使い、「～をかきます。」のような表現になっていることにも気づいた。教師は、児童の話し合いを板書で整理し、挿絵で確認させながら、文章構成や順序を表す言葉を視覚的につかめるようにまとめていった。

児童は、教材文が資料③のように、「初め」「中」「終わり」の文章構成になっていること

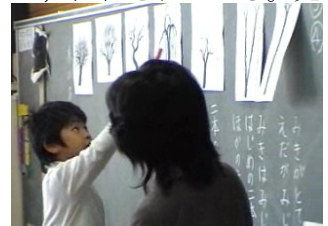
資料③ ワークシート

を知ることで、文章をまとまりに分けて大体の内容を読むという方法を学んだ。

叙述と挿絵を照らし合わせながら内容を正しく読む力を付ける

7つの挿絵を提示して、文章の中から挿絵の説明を書いてある叙述を抜き出す活動をした。児童が読み落とししたり読み間違えたりしそうな叙述を教師が予想しておき、話し合いをする際に、内容を挿絵で確かめたり、自分の言葉で言い換えたりさせて、内容を正しく読む力を付けるようにした。

図や挿絵も重要な情報である。叙述と挿絵と照らし合わせながら読むことは、非連続型テキストを読み取る力として、注目されている。児童は、テキストの中から必要な叙述を取り出すためには、挿絵と叙述を照らし合わせながら読むことが大切であるという読みの方法を学ぶことができた。

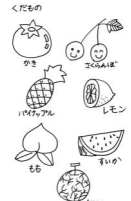


資料④ 叙述と挿絵を照らし合わせる

学びを確実にするための表現活動をする

☆表現することで、「読む力」を高める

「一本の木」で学んだことを生かして説明文を書くために、資料⑤のようなイラストを準備した。イラストは児童が4回ぐらいに分けて描けるような簡単なものを選んだ。



資料⑤

イラストの描き方を説明するワークシートは、順序を考えて書くことができるように4つのイラストとそれにあつた説明の言葉を書けるようにした。(資料⑥) イラストブックの説明書を作る時には、「初め」「中」「終わり」の文章構成を考えて書くことができるように、資料⑦のようなワークシートを準備した。どの児童も、学んだことを生かしてイラストの描き方について説明文を書き、書き終わった後は、自分で推敲をすることができた。

資料⑥ ワークシート

資料⑦ ワークシート

☆評価することで学びを確実にする

児童は、できあがった説明文について、評価の観点を以下のもつて、自己評価や相互評価をした。学んだことを基に、評価をすることで、友だちの良さを見付けたり、友だちに評価されることで自分の学びを確認したりすることができた。評価の観点がはっきりしているの

で、児童にとっても教師にとっても、「読むこと」で学習した力が生かされているかどうかを知ることができた。

〈評価の観点〉

- ア 「初め」「中」「終わり」が書けている
- イ 段落ごとに順序を表す言葉を使っている
- ウ 絵の説明を分かりやすい言葉で書いている

丸	ち	か	か	も	ん	お	上	そ	み	ま	し	ま	み	
の	う	か	か	が	じ	ま	に	と	じ	つ	さ	ま	の	一
ま	ま	い	て	で	う	の	に	に	か	ぎ	い	か	絵	人
ん	も	ま	ま	て	の	つ	に	に	い	に	う	か	し	の
甲	か	ま	ま	よ	の	ぎ	に	に	い	い	か	わ	か	女
に	も	山	は	丸	の	下	に	に	ら	の	に	だ	だ	の
い	も	山	は	丸	の	か	に	に	ら	の	に	だ	だ	子
も	山	は	丸	の	か	丸	に	に	ら	の	に	だ	だ	の
山	を	左	の	下	に	丸	に	に	ら	の	に	だ	だ	顔
を	そ	と	右	に	丸	の	に	に	ら	の	に	だ	だ	を
い	て	ど	山	を	の	上	に	に	ら	の	に	だ	だ	か
て		ど	山	を	の	か	に	に	ら	の	に	だ	だ	い



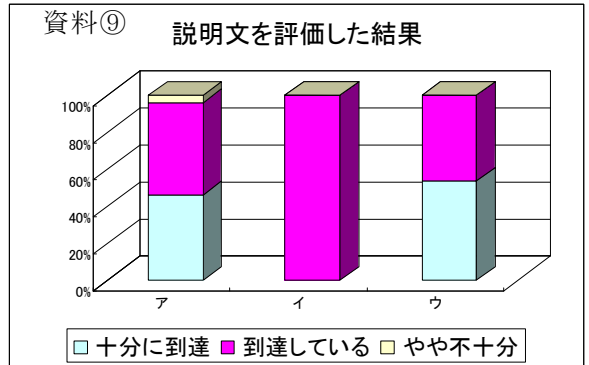
で	き	い	ち	く	り	丸								
き	い	ち	く	り	丸	の	中							
あ	い	ち	く	り	丸	の	の							
が	い	ち	く	り	丸	の	下							
り	い	ち	く	り	丸	の	に							
で	い	ち	く	り	丸	の	は							
す	い	ち	く	り	丸	の	山							
フ	い	ち	く	り	丸	の	が							
ラ	い	ち	く	り	丸	の	い							
フ	い	ち	く	り	丸	の	く							
ー	い	ち	く	り	丸	の	の							
ブ	い	ち	く	り	丸	の	ゴ							

資料⑧ イラストの描き方の説明文

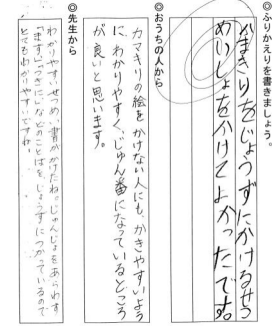
児童が書いた説明文(資料⑧)について、「読むこと」で学習した力を生かして書いてあるかどうかを、上記の観点に従って次のように評価した。

- ア 初め、女の子の絵の描き方を教えることを紹介し、その後、描く順序や描くものの説明を書いている。最後に、他のアレンジもできるというように付け加えの文章を書いている。
- イ 「さいしょに」「つぎに」「そのつぎに」「さいごに」という言葉を使っている。
- ウ 「5つの線」「3つのひも」「丸の上」など数や場所を表す言葉を使っている。

この児童は、文章にあわせて、イラストを描く位置も考え、文と絵を対応させている。また、絵の形を説明する際に、「フラフープ」「すべりだい」など自分なりに、絵を表す言葉を工夫して、相手に分かりやすく伝えようとしている。他の児童の作品も評価した結果、ほとんどの児童が、ア、イ、ウともに「十分に到達」及び、「到達した」と判断できた。(資料⑨) 普段、書くことに抵抗のある児童もイラストがあるので「一本の木」の学習を思い出しながら、書くことができた。どの児童も意欲的に書くことができ、自分の作品に満足していた。



児童は、相互評価をした後、自分の書いた説明文を持ち帰り、家の人の前で音読しコメントをもらった。また、その後、教師からのコメントも入れて返した。(資料⑩) 持ち寄った説明書は、資料⑪のようにそれぞれ種類別のイラストブックにまとめて、いつでも見ることができるよう教室に飾った。



資料⑩ 評価



資料⑪ できあがったイラストブックの説明書

V 結論
児童に国語力を付けるには、「読むこと」で付けた力を生かせるような表現活動を、単元のゴールに設定することが、有効であった。また、表現活動を行うことによって、「読むこと」での学びを確実にすることができた。

VI 今後の課題と方向性
課題
「読むこと」の活動で力を付けるためには、発達段階に応じて系統的に読む力を吟味し、その力を付けるための指導法についてさらに研究していくことが必要である。
国語力を確実にするためには、国語科以外の教科や日常生活などにも生かすことができるように、他教科との関連も図りながら指導を続けることが必要である。

方向性
発達段階に応じて読む力を付けるためには、教材で付けることができる力を分析し、学年に応じて、段階的に力を付けていくことが必要である。現在、教材で付ける力とそれらを生かせる表現活動について、学年ごとにまとめている。今後、現場に戻ってからは、国語科で系統的な指導を実践しながら、他教科や日常生活との関連を図って、研究を続けていきたい。